

問1 日本の歴史において、縄文時代に定住生活が始まり、生活が安定する中で普及した、表面をみがいて形を整えた石器を何と呼びますか。（2018年 徳島公立入試 類似）

1. 打製石器 2. 磨製石器 3. 青銅器 4. 鉄器

問2 縄文時代に作られた土偶の中には、わざと体の一部を壊した状態で発見されるものがあります。このような特徴から推測される、土偶が作られた目的として最も適切なものはどれですか。（2023年 香川公立入試 類似）

1. 病気や怪我のある部分を壊すことで、その痛みを土偶に引き受けてもらおうとする身代わりの願い。
2. 土器を作る技術が未熟であったため、焼成の過程で自然に壊れてしまうことを前提とした観賞用。
3. 集落間の争いにおいて、倒した敵の姿を土偶に投影し、戦勝を記念して破壊する儀礼用。
4. 大陸から伝わった高度な彫刻技術を模倣しようとして、失敗したものを廃棄した残骸。

問3 北海道やその周辺地域において、樹皮を加工した繊維で織られた「アットウシ」と呼ばれる伝統的な衣服や、独自のアイヌ語といった文化を継承してきた、法律によって日本の先住民族と明記されている人々を何と呼びますか。（2026年 埼玉公立入試 類似）

1. アイヌ民族 2. 琉球民族 3. 渡来人 4. 大和民族

問4 縄文時代において、人々が定住生活を送る中で作り出した遺物のうち、表面に縄目の文様が見られることが多く、食物を煮たり保存したりするために活用された道具の名称とその特徴として適切なものはどれですか。（2024年 熊本県公立入試 類似）

1. 高温で焼かれた灰色で硬い、貯蔵用の須恵器 2. 厚手で黒褐色をしており、低温で焼かれた縄文土器
3. 薄手で赤褐色をしており、文様が少なく実用的な弥生土器 4. 古墳の頂上や周囲に並べられた、人物や馬の形をした埴輪

問5 縄文時代における食生活の工夫と、それに伴う住環境の変化について述べた文として正しいものはどれですか。（2016年 愛知公立入試 類似）

1. 狩猟・採集による食料確保に加え、土器で煮炊きを行うことで食べられるものが増え、竪穴住居での定住が進んだ
2. 大陸から伝わった稲作が広まったことで食料の余剰が生まれ、それを保管するために高床倉庫が普及した
3. 氷河期が終わり温暖になったことで大型動物が絶滅したため、移動を繰り返しながら洞窟で暮らすようになった
4. 青銅器や鉄器などの金属器を用いて効率的に食料を生産するようになり、外敵を防ぐための環濠集落が作られた

問6 縄文時代の人々が、遮光器土偶に見られるような独特な形をした土製品を多く製作した理由として、当時の社会背景から考えられる背景はどれですか。（2026年 千葉公立入試 類似）

1. 自然の脅威や病気に対して、超自然的な力による解決や生命力の向上を祈る必要があったため。
2. 強力な王が国を統一し、自分の権力を誇示するために同じ形の像を大量生産させたため。
3. 大陸との交易において、日本の特産品として輸出するための芸術性を追求したため。
4. 金属器がまだ普及しておらず、全ての調理器具や狩猟道具を土で作る必要があったため。

問7 約1万年前に地球の温暖化が進んで海面が上昇し、日本列島が形成された時期の生活の様子として、最も適切な説明はどれですか。（2022年 山口公立入試 類似）

1. 地面を掘り下げた竪穴住居に住み、弓矢を用いた狩猟や木の実の採集、漁を中心とした生活を営んでいた。
2. 大陸から伝わった稲作が本格的に広まり、収穫した米を保存するために高床倉庫が作られるようになった。
3. 各地で大規模な灌漑施設が整えられ、太陽暦を用いて農作業の時期を管理する生活が始まった。
4. 強力な支配者が現れ、自らの権威を示すために巨大な古墳を築き、その周囲に埴輪を並べるようになった。

問8 縄文時代の遺跡である貝塚が、当時の社会や生活を研究する上で「考古学的資料」として極めて重要視されている理由として、最も適切な説明はどれですか。（2018年 香川公立入試 類似）

1. 食べた後の貝殻や骨、破損した土器などが堆積しているため、当時の人々の食生活や利用していた道具の種類を具体的に知ることができるから。
2. 巨大な石材を用いた石室や、死者とともに埋められた豪華な副葬品が発見されることで、当時の強力な権力者の存在を証明できるから。
3. 集落の周囲を深い溝で囲むことで、稲作をめぐる集落間の争いがあったことや、防衛のための組織的な仕組みがあったことを示すから。
4. 炭化した米や高床倉庫の跡が発見されることで、当時の人々が計画的に食料を生産・貯蔵していた社会構造を裏付けるから。

答え合わせ・解説

問1	答え 2 磨製石器	旧石器時代には石を打ち砕いただけの打製石器が使われていましたが、縄文時代に入ると用途に合わせて表面をみがき、形を整えた磨製石器が普及しました。この変化は、定住生活の開始や土器の使用といった生活様式の大きな転換と密接に関わっています。
問2	答え 1 病気や怪我のある部分を壊すことで、その痛みを土偶に引き受けてもらおうとする身代わりの願い。	土偶の多くが女性を模しているのは、新しい生命を生み出す女性の力が、大地の豊かな実りと結びつけられていたためと考えられています。また、出土する土偶の多くが破損している理由については、自分の病気や怪我の場所と同じ部分を壊すことで、回復を祈る「身代わり」としての呪術的な儀式に使われたという説が有力です。これは当時の人々にとって、土器作りや土偶作りが生活に密着した切実な信仰の一部であったことを示しています。
問3	答え 1 アイヌ民族	北海道とその周辺に独自の文化を築いてきた人々で、2019年に施行された「アイヌ施策推進法」により、初めて法的に「先住民族」と位置づけられました。樹皮を用いるアットウシのほか、サケ漁や狩猟を中心とした生活様式を持ち、自然界のあらゆるものに魂が宿ると考える独自の精神文化を持っています。
問4	答え 2 厚手で黒褐色をしており、低温で焼かれた縄文土器	縄文時代の人々は、定住生活を営む中で土器を発明しました。この土器は低温で焼かれるため厚手で黒褐色になるのが特徴です。煮炊きが可能になったことで、それまで食べられなかった植物の灰汁（あく）を除いたり、固いものを柔らかくしたりして食べられるようになり、食生活が安定しました。
問5	答え 1 狩猟・採集による食料確保に加え、土器で煮炊きを行うことで食べられるものが増え、竪穴住居での定住が進んだ	縄文時代には、土器を使って食物を加熱調理（煮炊き）する技術が普及しました。これにより、以前は消化できなかったデンプン質の木の实なども食用にできるようになり、食生活が安定しました。その結果、人々は一箇所に留まって生活するようになり、竪穴住居による集落が形成されました。稲作や高床倉庫、金属器の使用は、その後の弥生時代の特徴です。
問6	答え 1 自然の脅威や病気に対して、超自然的な力による解決や生命力の向上を祈る必要があったため。	縄文時代は自然の産物に依存した生活を送っていたため、気候変動による食料不足や病気は死に直結する大きな脅威でした。科学的な知識が限られていた当時、人々は「祈り」を通じてこれらの問題を解決しようとしました。そのため、女性の生命力を象徴する土偶などを通じて、食物が豊かになること（豊穡）や、部族の繁栄を願う呪術が発達したと考えられています。
問7	答え 1 地面を掘り下げた竪穴住居に住み、弓矢を用いた狩猟や木の実の採集、漁を中心とした生活を営んでいた。	氷河時代が終わり地球が温暖化したことで、海面が上昇して日本列島が大陸から切り離されました。この時期から始まる縄文時代では、人々は定住を始め、地面を掘り下げて床とした竪穴住居に住むようになりました。自然環境の変化によって出現した中小動物を射止めるための弓矢が普及し、植物の採集や、骨角器を用いた漁など、自然の恵みを多角的に利用する生活へと変化しました。稲作や高床倉庫は後の弥生時代、古墳は古墳時代の特徴です。
問8	答え 1 食べた後の貝殻や骨、破損した土器などが堆積しているため、当時の人々の食生活や利用していた道具の種類を具体的に知ることができるから。	貝塚は単なる「ゴミ捨て場」ではなく、何層にもわたって当時の生活の痕跡が積み重なったタイムカプセルのような役割を果たしています。出土する骨の種類から、季節ごとの狩猟・採集活動の様子を分析することができ、縄文時代の人々が自然のサイクルに合わせて豊かに暮らしていた背景を裏付ける資料となっています。